いわうである。　これは池に向って大きな入母屋を見せた入り屋造りであって、破風の輪郭をなす大屋根の彎曲や、下でそれを受けてる軒端の弧のかすかな跳ね上りなどが、いかによく利いてる。その屋根の下には、一間幅の縁（廣）の奥に雨戸と障子とが立って居り、その上に三尺（高さ）ばかり上あり合うような大きい小壁が、柱に区切られて、白い方形や矩形になって並んでる。　これは小壁を全く見せない（現在の）中書院の軒先や、小壁を見せはするがそれが横に細

国立国会図書館　　タイトル『桂離宮』　請求記号 WB12-71

ガラス使用

もとは見えてゐた
といはれる中書院
の内側の障子の
上の細長い小壁
は全く見えなく
なり、新御殿の

長い矩形になつてゐる新御殿の軒先などに比
べて、非常に感じの異なる点である。一つは
古書院の雨戸や障子が一間の奥行の縁の奥にあり、
隣のそれに對して、現在の中書院や新御殿の外障子が
廊下の外にあり、隣からずつと引込んで
軒へずつと近くなつてゐる、外障子の上の小壁
らうがとにかくそれによつてゐる、という情
や軒下の小壁の白い面線の美しさなどは、古
御殿の見せてゐる外障子の白い平面の美しさ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

書院の池に面した姿の中には、全く見られないのである。大いも古書院の他の箇所にも、さういふ美しさが見られめでもない。古書院を南側から、即ち中書院の側から眺めれば、軒下の白い小壁は床下の白壁と照應して、白い平面の美しさを感じさせよ。また古書院の御簾等の姿は、直線的なもの平面的なものの美しさを惱喪させるものである。が、これらがいい、いい、古書院の最初の姿であつたかどうかは、難かい問題になる。それらを除いて、池に面し

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

一行つめ

た古書院の姿のうちに最初の姿を認めるとすれば、この最初の建築においては、特に平面的なものや直線的なものを際立たせてそこに美しさを作り出すといふ試みは、なされてゐないのである。即ち、古書院の最初の姿は、石の反り橋を指標とするにふさはしいのである。

しかしかく考へることは、古書院が最初獨立して建てられたこと、中書院や古書院の御興宴などは後の建て増しであること、などを認めるに等しい。然るに専門家の間では、このことは必ずしも異

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』　請求記号 WB12-71
ガラス使用

論なく認められてゐるわけではない。

に困難はないであらうか。

元来中書院が後の建て増しではないか

といふ考は、床下構造の著しい相違から自ら

に導き出されたかうに見える。古書院は土壇

の上に立ってゐるか、中書院は土壇なく高床

式に作られてゐるのである。いづれも桂川の

氾濫に備へた思ひつきに相違ないが、しかし

そのために、かくまでも異なった構法を考へ

出すといふことは、造営年次の相違に基くと

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71　　ガラス使用

しか考へられない。といふのは、古書院の建築が始められたのは第一次造営の初期であって、池掘りがなほ続いて居り、土が豊富に余ってゐた。だから土壇を築くことも容易であった。しかし中書院の建築の時には、池の工事は既に終って居り、土壇に使ふ土が手近かになかった。だから土壇を築く代りに高床式の構法が考案されたのであらう。さう考へれば、構法の相違がいかにも充ちてゐると共に、それが建て増しの証拠にもなるのである。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

ある。に、藤島亥治郎氏の「桂離宮」によると、同氏は古書院が一棟だけで立ってきたということに強い疑念を抱いてる。その理由は、(一)これだけの建物に對して御輿寄が大き過ぎる。(二)池の側から眺めて帳部が單純過ぎる。中書院がつかない。(三)間取りの上でも中書院がつかないと非常に工合の悪いことになる。古書院ほどの意匠の出来る人が、これらの諸点に氣づかない筈はない。だから古書院は中書院が(たぶん)一棟だけ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』　請求記号 WB12-71

ガラス使用

で立ってゐた時期があるとは考へられない。

中書院、更れは楽寝の間までが、最初から結びついてゐたであらう。即ち、玄書院は表座敷、中書院は寝間その他内向きの部分であって、両者合して一つの全体をなしたのである。

かく藤島氏は主張してゐるのである。

勿論藤島氏も、中書院が玄書院よりは遥かに床脇が細かであるとか、くつろげてゐるとか、といふ点を認めないのではない。しかし氏はさうい

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

ふ相違が、表座敷と縁側その他内向きの部分
といふやうな用途の別から出てくることを没
くのである。表座敷たる古書院が室、
れ、内向きの部分たる中書院が軽く取扱はれ
るのは、当然であらう。だから古書院の正面
入母屋に對して、中書院を側面入母屋として、
屋根を一段低く連ねてある。同様に床下も、
土壇を築くといふやうな重苦しさを避けて、
強更に高床式といふ軽やかな構造にしてなの
である。さういふ仕方によって建築に変化を与

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

へ、一様の統一とか均斉とか避けたのであつて、それがこの「素晴らしい美の構造」を押し出して来た所以であると氏は力説してゐる。

この立場からいふと、独立の古書院が土壇の上に立つてゐる姿などは、あまりに仏堂臭くて、古の美の構造と縁遠いものになる。

尤も藤島氏は一歩を譲つて、古書院建築中の設計を変更して中書院をつけ足すことなどは、やり得るといつてゐる。

しかしこの場合でも、古書院完成以前に中書

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

院が創立されたのではなくてはならないと考える。つまり古書院が最初独立の建物として設計されたということまでは譲歩するが、その古書院が独立の建物として存在したということは認めまいとするのである。

この考え方を更に一層徹底させてみるのは、森蘊氏の桂離宮の研究（一九五三年）で詳述してある考である。それによると、桂離宮の中で最初に建てられた建築は今の中書院であり、今古書院と呼ばれてる部分は、古い建物を

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

持つて来て、この新築の書庫に附け足したものだといふ。森氏がこの家に到着したのは、古書院と中書院との間にある柱を洋服の洞査したからであつた。それによつて先づ第一に解つたのは、中書院の周囲にそとは勾欄が廻らしてあつたといふことである。それによつて、現在外障子や雨戸や雨戸の戸袋の立つてゐるところに、そとは雨戸や外障子やなく、三尺の擂板縁の内側に遣戸や明障子が立つてゐたことが解る。次に右の柱穴のところにある

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

角柱や面皮柱などに注目して屋根裏を調べて見ると、古書院の小屋組にはこうで様を変へたらしい痕跡がかなりある。かと思ふと、古書院一の間の床柱の杉の面皮材などには、あとから取りつけたといふ痕跡がまるでない。つまり中書院三の間の面皮材と同じやうな材木が、古書院一の間(に)は初めから用ゐられてゐたことになる。それらの点から考へると、中書院の工事と古書院の工事とは同じ時に行はれてゐたのであり、古書院の建築様式が古

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

いのは、他から持つて来た古い建物だからなのである。小屋組の様変りの痕跡は、さういふ古い建物を中書院にうまく取付け足すための工作を示すものであらう。

森氏はなほ桂離宮初期の中心建築は中書院であつて、古書院はむしろ附属的地位にあつたといふことを、間取りの点からも説明しようとしてゐる。藤島氏の解釈では古書院が表、中書院が寝間、その他内向きの部分といふことであつたが、森氏の解釈はそれとは逆

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

寄6
中書院
一面

で、中書院が公的な性格を明瞭に表示してゐるのに對し、大書院はむしろ從屬的な意味しか示してゐないといふのである。その公的な性格を示すものとして森氏があげてゐるのは、中書院一の間の床を二の間の方から眺めた場合のシムメトリーの構成である。そのために二間の大床を作つて違棚を右側に廻はし、いかにも親王の御座の閑かしい事實を見せてゐるといふ。また左こうの縁側との境の遣戸には縦桟を入れ、框は青漆塗にし、縁の端

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

いは白横がめぐらしてあつた。いかにも丁寧なやり方である。それに比べると古書院の池に面した側は、入母屋作りの屋根の形から言つても極めてシムメトリーになり易いところだと思はれるが、それを下から受ける柱の並び方や、小壁のつけ方や、庭への出入口、月見台などの設け場所などが、すべてシムメトリーを破るやうに出来てゐる。さうして廣縁の奥にある遣戸などは非常に粗末な板戸である。親王の御座の間のやうに重大に取扱はれてゐないことは明かだといはなくて

はならない。

坂上が森氏の見解の大要である。藤島氏の主張と共に非常に傾聴すべきものと思はれるが、しかしわたくしはまだ十分に了得されたといふ気がしない。藤島氏の論点について、ふと、(一)大きく区切るといはれる時準等は、中書院と共に建て増されたとと考へられる。(二)池の方から眺めた軍記な輪郭は、その軍記さの故にあとにいろ〳〵な庭園を含む官能的な姿であるのかと知れない。(三)間取りの点は、

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

最初簡素な別荘を考へてゐたとすれば、古書院だけで十分間に合ふであらうし、圍爐裏の間の南西側には、何か別のやり方がしてあつたかも知れない。また用途の別に随つて建築にいろいろな変化が與へられるといふことも、一時的にではなく、時をへだつて漸次に起り得ることである。すでに藤島氏も一歩を譲つて、古書院建築工事中に設計が変更された、といふ場合を想像された。これは、最初古書院だけを獨立の建物として設計せられた八條宮

庭の整備も三年位かゝつて徐々に進行させてある

か、それを建築中に、中書院をつけ足すことを考へ出されたと認めることである。つまり半年か一年かの時の流れをこの間に認めようとするのである。かさういふ風に時を追つていろ／＼新しい構想を生み出してくることは、八條宮にとつては比較的容易なことであつたかも知れぬが、しかし同様な容易さを以てそれを実行に移すことは、果して知行三千石の八條宮に可能であつたであらうか。~~当時の宮廷~~ ~~仙院の経済はよほど不如意であつたと思はれ~~

のであつたとしても

庭の普請も三年位かゝつて徐々に進行させてゐる

八條宮は新様であつたかも知れないが、普請の途中で設計を変更して最初の倍以上の大きさにするといふやうなことを、自由になし得られたかどうかは疑問である。非常によい思ひつきでも、経済上の理由で、何年か先に延ばされるといふのが、恐らく実状であつたであらう。さうなれば中書院は、構想としては古書院完成前に、即ち古書院と一つのものとして、出来たのであつたとしても、事実上では、何年か後に、

建て壊しとして実現されたということになる。

さうしてその仕事かの頃に、その構想は、同じ人の同い時の思ひつきとはさうしても考へうれないほどの、異なつた性格のものは変つて行つたのであらう。

森鷗氏の赤についても同様のことが言へる。中書院の縁側にも匂橋がついてゐたとか、隙の内側に遣戸や明障子があり、その遣戸や框の細工が非常に念の入つたものであるとか、といふことは森氏の赤夢の通りだと思はれる

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

か、こゝあしそれは最初の建築の古書院か比較
的質素なものであるに對して、後の建増しの
中書院がすつと贅澤なものになつてゐること
を示すだけだともいへる。また最初の建築の
時には「親王の御座の間」などといふことにはま
るで注意を拂はなかつたのか、建て増しの時
にはさういふ意識をはたらかして幾分物々しくしたと
いふこともあり得るであらう。その際シムメ
トリーの構成を使つてゐるのと、使つてゐな
いのとか、さういふ「御座の間」とさうでな

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

いものとの区別を示すといふことは、一寸受取り難い。その別は様式感覚の別を示すのであつて、必ずしも室の用途の別を示すわけではあるまい。さう考へて行けば、森氏が、中書院こそ中心的建物であつて、古書院は附属的な部分に過ぎないといふことを証明しようとしてゐる議論は、皆、古書院が最初質素に建てられ、中書院が後に異なつた様式感覚を以て贅澤に建てられたといふことを証明するのに役立ちさうである。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

しかしたぐ一ら、古書院と中書院との継ぎ目の部分の屋根裏の調査のことについては、わたくしには何ともいう資格がない。古書院の小屋組には、古い建物を持って来て新築の中書院に附け足したという痕跡が歴然として残ってるるといわれると、それを反駁するわけには行かない。しかしそれほど明白な証拠なら、建築の専門家は皆文句なしに認めさうなものだと思はれる。私もにわかにしもさうでないところを見ると、この証拠はそれほど強

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

對的なものではないと見える。

「桂離宮」は森氏の「桂離宮」の翌年に刊行されたものであるが、それによると、古書院と中書院との間には、同じ時代の同じ人の指図で作られたとはどうしても考へられないやうな、手法の相違があるといふ。古書院は角柱で、一分面とりの杉材を使つてゐるが、中書院は杉面皮柱であり、古書院は軒先に小壁を大きく見せ造りであるか、中書院は軒の所に小壁を見せない造りである。かういふ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

の比例」に現はれてゐる好みは、相互に殆んど相容れないものである。だから同じ時の同じ人の作とは思へないのである。それに反して、中書院を建て増しと考へると、丁度それの證據となるやうな箇所がところ〴〵にある。古書院御輿寄の丸太の軒桁が、それを支へる柱は、中書院を建て増した時に、それに合せて取りつけた、と思へる仕様を持つてゐる。また古書院と中書院との継ぎ目にも、さういふ点がある。といふのは、この継ぎ目は、

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』　請求記号 WB12-71
ガラス使用

玄書院の長燈の間や詰所と、中書院の三の間との間にあるのであるから、部屋としては床の間のついてる（中書院）三の間の方が格が高く、隨つて中書院側の方が重いわけであるが、それも拘はらず、柱は玄書院を主とした建て方であつて、角柱が三の間の方へ表はれてゐるのである。これは中書院を建て増しとしないでは理解することが出来ない。尤も使はれた材料に新旧の別は認められないから、建て増しとしてそ年月の距りはあまりないであらう。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

これが堀口氏の意見である。建築の専門家の立場からかう言はれると、わたくしはこの方に従ひたくなる。それに従へば古書院が独立して存在してゐた時期はあつたことになる。さうして中書院は、古書院よりも後に、古書院とは非常に異なつた手法を以て建て増されたのだといふことになる。

これを前に論じた石橋に結びつけていふと、古書院は天橋立の反りのある石橋を指標とする時期の建物であり、中書院は白川石の直線

則な石格を指標とする時期の建物である。前者は第一次生堂の前半を示し、後者はその後半を示してある。さうしてこの両者の間には、堀口氏の言葉をかりていへば、同じ人の同じ時の指画によって出来たとはとうしても思へないやうな手法の相違があるのである。

この新しい手法によって作られた部分は、中書院や古書院、御殿等などであるが、それらがどういふ様式をもってゐるかを考察する前に、なほ考へて置くべき問題が殘ってゐる。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

それは前に加藤左馬助進上奥州白川石の問題を提出した時に、それと並べてあげて置いた八條宮妃常照院殿の消息のなかの「いよ／＼思しめす御使に御普請遊ばされ候はんやうの御事」といふ文句である。この普請が中書院や古書院御輿寄の建て増しの工事を意味してするならば、これは示された新しい手法と八條宮の「思しめす儘」とが結びついてくることになる。これは相当に重要視してよい問題であらう。

改頁

八日 思ひ出す儘の普講

八候宮妃常照院殿のことは前に八候宮の身
辺の事情を〔説い〕た際に詳しく述べて置いたが、
森藩氏がの桂離宮の研究のなかで引用され
た常照院殿消息によると、この妃はよほど深
くハ候宮の普請に関与してゐられたあうに見
える。特にハ候宮の生前における中根左京

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

写下ス

の消息には、庭や建築れ言はしたものが非常
に多い。その中の一部はすでに三の「桂離宮の
遺覚の両妹」において考察し、それによって
八條宮と申松左実との関係を考察したのであ
るが、ここで必要なのは森氏が松琴亭の茶室
に関聯して引用された文のだけである。

昨日は御口切、日出度御座候。殊に、
御園、見事に出来参らせ候て、数々目出度
さ、筆久しく候も、いよ〳〵思召通御儘に
御普請(ふしん)はされ候はんかうの御事と、

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

(下13)

祝入参らせ候。めづらしく奇薬に美しくあて
未参らせ候。一入御出度く思召参らせ候。

この手紙は、一見したところ別に難解のや
うにも見えないが、こかしいかにも女らしく
心使ひが細かに動いてゐるために、よほど注
意して読まなくてはならないやうに思はれる。
書き初めの一行は、この手紙を書いた日の前
日に催ほされた初の茶会に対する祝意を言
ひ現はしたものであって、内題はないが、次
で「殊に」以下に書かれてゐることが内容に

419

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71　　ガラス使用

なる。「殊に」といふのは「殊に目出度いことは」の意味であらうが、それは「いよいよ思召す御盡に御普請遊ばされ候はんやうの仰せ」を指してゐるのであらう。しかしそれを言はうとして「殊に」と言ひ起した時に、さういふ未来の普請のことよりも、口切の茶会を催すやうになつた茶室の普請の竣工について未だ祝意をのべてゐないことに氣づき、そこへ急に「御囲、見事に出来参らせ候て」非常に目出度いといふ言葉を挿んだわけであるが、し

かしそれよりも将来の普請の決定の方が一層重要であることを言ひ現はすために、茶室の竣工は「数々目出度さ、幾久しく候も」と受けたのであらう。茶室が見事に出来たのは目出度いが、しかし宮がいよいよ思ひ通りの普請をしようと決定されたことの方が、一層祝ふべきことである、といふ気持が、そこにはつきりと出てゐるやうに思はれる。「めづらしく太の叢に美しく」といふのは、すでに峻工してゐる茶室の出来栄えを賞讃した言葉であ

って、前の「見子に」といふ言葉の発展的な繰り返しである。
以上のやうに解すれば、茶室が既に出来上ってあるといふ過去の事情と、宮が「いよいよ思召す所儘ル的普請遊ばされ候はん」と言はれてゐる未の事情との間の、矛盾はなくなる。さうしてこれらの二つの事情については八條宮妃が中院左京に對して說意を言ひ送られたのは、一方で左京が茶室の普請に関係してゐたことを示すと共に、他方でこれから始めようといふ普請もまた左京

京のたづさはる普請であること、それの決定は左京にとって没すべきことであったことを示してゐるが、それのみでない。中沢左京の普請に對して八條宮妃もまた非常に関心を抱いてゐられたことは、その消息によって明白であるが、それは取りもなほさず八條宮妃が八條宮の普請のはかどるに對して非常に関心を抱いてゐられたことの反映であり、さうしてそれは八條宮自身がこの普請のはかどるに熱意を持ってゐられたことの証據である。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

宮が「いよいよ思ひ出す御儘に御普請遊ばされ候はんやうの御事」を書いてゐる。この消息の文章を見ると、妃はそのことを左京に向つて祝つてゐるのではあるが、同時に妃自身がいかにも嬉しさうに見える。どうかして夫の君に思ひ通りの普請をさせたいといふことを思ひ続けて来た妻が、やつとのことでその思ひを達したのだといふ気分が見えぬでもない。もしさうであるならば、その夫の君もまた思ひ通りの普請をして見たいといふことを思ひ続けてゐられたわけであらう。これは

八條宮の心に建築や庭園についての構想が湧き
巻いてをり、それが抱えず実現を要求して止
まなかつたといふことを意味してゐるのであ
る。こゝに桂別業の建築や庭園の作者を八條
宮と考へてよい有力な根據が提示されてゐる
といつてよい。

八條宮妃のこの手紙にはつきりとした日附
があれば、茶室の竣工時期は文句なく確定す
るのであるが、そのことは別としても、茶室
の「いゝ、いゝ、」の竣工の後に八條宮の「思ひ通りの普請」が

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

始められたということを知るのは、非常に有益である。車はよれはそれが中書院の建て増し、古書院御興等の改造であったかも知れない。それらの普請を思ひの儘にさせない事由は、多分財政上のそのであったであろうから、それを丹後の国主の姫である宮妃の盡力で取り除くことが出来たといふやうなことも、なかったとはいへない。父親京極高知は元和六年に没したが、あとを継いだ弟の高廣は、寛永三年に、池田輝政の娘で家康の外孫に当る人

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

と結婚した。さういふ際に、高貴の姉かう候実妃であることは、多分大きい意味を持つてゐたであらう。その一方大きい意味」かゝその「寛永三年」とあまり距つてゐない時期に、八條宮家の財政の上に或反應を現はしたとしても、少しも不思議はないのである。

さうなると、奥州白川召加寛永四五年の頃になこの庭に入つたといふことと考へ合はせて、寛永三年以後の普請の隆行といふことは、いよ〳〵確からしくなつてくる。しかもそれが

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

八條宮の「思ひの儘の普請」であったとすれば、桂離宮の藝術的形成にとっては、この事に負うところ、重要な時期があったことに負うところ、さういふ時期の開始が、松琴亭の茶室の竣工に際して強示されたとすると、松琴亭の茶室の普請といふことも、桂離宮の藝術的形成の過程において、非常に重要な意味を帯びることになってくる。

一体、この茶室が附置される前の松琴亭はどんなものであったのか。それに對して茶室の

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

一行目

普請は何を意味したのであるか。

前に言つたやうに、桂別業の庭園のエすが周姑され、古い水溜りの西側が廣く池として掘りひろげられた時に、まづ建てられた建物は、池の西側では古書院、東側では松琴亭であつたと思はれる。かその松琴亭は、今の建物の半分ほどの母家だけであつた（であらう。）

さういふ推測に人を誘ふのは、第一次造営の前半の指標たる天の橋立の石の反り橋である。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

この石橋の反りは、池の向ふに大きく入母屋のひを開いてゐる古書院の屋根の弯曲線と、ひったりいきを合はせてゐるのであるが、

前章の初めに詳しく論じたやうに、

その同じ石橋の反りが、松琴亭の大屋根に見られる如かな弯曲線とも同じやうに実によく調和を合はせてゐる。（さういふ弯曲線の現はれてゐるのは正面から見た大屋根のみであって、松琴亭の側面の形はこのことにかゝはりがない。）

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

写真 7
蘇鉄山東南池際より松琴亭を望む

（岡版四半頁）

松琴亭が天の橋立の石の反り橋と一緒に視界に入つてくるのは、對岸の蘇鉄山の東の麓、滝口から池へ水が流れこんでくるあたりから、松琴亭を遠望した時である。その時には松琴亭の北（西）側がまともに見えるわけであるが、たとひ北（西）側であつても、それが松琴亭の正面であることは紛ひがなからう。昔松琴亭へ渡つて行つた朱塗欄干の橋は、蘇鉄山の南の麓からかゝつてゐたわけであるが、そのあたりから眺めても、又同じ正面が見えたわ

けである。松琴亭の屋根は田舎屋風の茅葺の大きい屋根なのであるが、その屋根が下るこの方へ正面を見せてゐる。棟には瓦を並べてゐるが、その棟の線は左右へ真直にのびてゐるやうで、両端で幽かに上へあがつてゐる。多分全体として僅かに彎曲してゐるのであらう。そこから流れ下りてゐる茅葺の屋根は、その軒端で左右へ真直に切り揃へてあるが、軒の線も棟の線と平行して、左右で幽かに上へ上つてゐる。これも多分全体として僅かに

彎曲してゐるのであらう。それらの反りは極く僅かなので、左右の端の方だけで反つてゐるのか、或は全体として反つてゐるのか、一寸見ただけでは解らない。それほど僅かな彎曲であるにかかはらず、それが直線ではなくして彎曲線であるといふことは、非常にはつきりと印象される。だからそれを石の反り橋と一緒に眺めてゐると、それらが同類のものであるといふことは、否應なしに感じざるを得ないのである。石の反り橋の左り手れは、

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

少し遠くに白川石の直垣的な格も見えてるが、松琴亭の大屋根と一緒に眼に入ってくる時には、反り橋の方がこの場にふさはしく、直垣的な格は反って引次的なものに感じられるう。

このやうに石の反り橋は、古書院とぴったりいきの合ったものであると共に、また松琴亭の母屋とも同類のそのとして感じられる。

とすれば、その古書院と松琴亭の母屋との間にも、同じくいきの合った感じ、同類のもの

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

しての感じが見出されるのは、当然のことであらう。池越しに古書院を眺めると、まづ際立つて見えるのはその屋根の形である。池の方へ大きく反を打つてゐる入母屋の屋根の輪郭の線は、遠方に中ふくらみを持つてゐる。それはいかにも僅かな弯曲であるが、しかし弯曲線として非常に強い印象を與へる。それは池越しに桂離宮の大屋根を眺める場合に限らず、何處から眺めても、その棟の線にしても、軒の線にしても、弯曲は極めて僅かなのであ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

か、しかし湾曲線としての印象は非常には
つきりしてゐる。これはどうしても同じ時に
同い構想によつて作られたものと考へざるを
得ないであらう。

ところで池越しに左書院の入母屋の屋根を
眺めてゐる時には、松琴亭は背後にある。尚
殿の大屋根は眼に入つて来ない。その松琴亭
の大屋根の正面の姿を池越しに眺めてゐる時
には、同いく左書院は右手横にあつて、その
入母屋の妻を同いてゐるところは全く見えな

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

い。随って同じやうな弯曲線を持つた屋根を見比べることは、今は出来ないのである。

それを赤へと、前に一寸言及した朱塗橋、平の橋の意義が、漸くわたくしの心に蘇って来た。この橋はあるほど必要であったのである。この橋のよって最初の桂別業の庭園と建築とが、一つの按配にしたらされたのであったであらう。

この橋は欅鉄山の南の麓から松琴亭の左前

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

方の岸へかうつてゐたのであつた。この位置は、そと古い水溜りであつたらしい、底の深い部分を、一寸東北の方へはづれてゐる。隔つてその橋脚は、新しく掘つた淺い底に立つてゐた笑ひである。これはその工事がさほど困難でなかつたことを思はせるものであるが、しかしさういふことは池の水面だけを眺めてゐる人には問題にならない。實々とひろがつてゐる池のところに、長さ十間を超える長い木橋が横はつてゐたわけである。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

その橋は、日本の木橋の常法として、上へ反
っているだろう。とすると、それは、天の
橋立の石の反り橋に比べて、六七倍以上もあ
ろうと思われる大きい反り橋であったことに
なる。さういふ巨大な弯曲線が女書院と松琴
亭との中間にどっしりと据えてあったとす
と、女書院も松琴亭の屋根に少しでも弯曲線
が現われてゐなかったならば、ひどく不調和
な感じられたかも知れない。今さういふ弯曲
線の効果を僅かに再現してゐるのは、天の橋立

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

のその反り橋なのであるか、その効果を付倍かい強めたとのが、朱塗橋子の橋によって示されてゐるわけがあるか。

その橋が、單に亭曲弥を示してゐるのみならず、また松琴亭の屋根の面の形と、玄書院の池に面した屋根の形とを、見比べ得る場所ともなってゐるのである。前に松琴亭の面の姿を問題とした時に、それを眺め得る場所の一つとして、蘇鉄山の南の籬、朱塗橋子の橋の北の橋詰をあげたが、実際、この橋に

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

ろうとする時には、松琴亭の茅葺の大屋根の正面の姿が非常によく見える。それはいかにも田舎家らしい屋根の形であり、またその屋根の下の、廣々と吹き放しにした土底とか、その吹き放しのところに、即ち家の外に設けた室廻の構へとかも、いかにも田舎家らしい意匠で、どうやら「瓜畑のかろき茅屋」の延長であるらしく思はれる。さういふ松琴亭の正面の姿は、橋を渡って行く途中にもおつと見え始めるのであるから、その橋の途中まで

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

行つて左手を廻り込ると、古書院の池面した側が見え始めるのであるが、その入母屋の屋根の輪郭線は中ふくらみであつて、松琴亭の棟や軒の中凹みとは逆であるが、しかし彎曲線であることに変りはない。そのいづれもが、極めて僅かの彎曲でありながら、しかも彎曲線として非常に強い印象を与へるといふことを、見比べて判断し得る位置は、まさにこの彎曲した橋の上だつたのである。

かう考へてくると、新しく掘つた池の両側

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

に古書院と松琴亭の母屋とだけが向ひ合つて立つてゐた頃には、この朱塗欄干の橋が非常に重要な役目を果してゐたことになる。古書院に中書院や新御殿が建て増され、松琴亭もまた著しく増補されてゐる今の桂離宮の姿から考へると、朱塗欄干の大橋などといふものはどうもしつくり合はないやうに感ぜられるが、それは建て増しの際に新しく入つて来た意匠が漸次支配的に働くやうになつて来てゐるからであつて、さういふ意匠の入つてくる以前

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

一行アキ

は、反りのある朱塗欄干の橋が廊の中程に置
かれてよいやうな、或は置かれなくてはならな
いやうな、さういふ院一かこの庭と建物と
に歩いてあつたのである。

さてそれが寛永一二年頃の桂別業の姿であ
つたとすると、中沢左京のかつた桂琴亭の基
室の建て増しは、小堀遠州の修営の思し召す儘の善講
への出発点として、非常に意義深いものにな
ってくるであらう。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

写真 8
松琴亭
玄北面

この茶室は、松琴亭の正面に向って左側、即ち東北側から入るやうになつてゐる。ちやうどその茶室の前に奥州白川石の橋かかつてゐるのである。随つてわれわれは、この橋の向ふから、松琴亭の東北面の姿を見ることが出来るのである。こゝでは正面の姿と異なつて、屋根に反りが全く現はれてゐない。それが最初からであるか、或は建て増しの際の改造であるか、それが先づ最初に決定さるべき重要な問題として現はれてくる。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

こゝに見えてゐる松琴亭の東北面は、正面から見た茅葺大屋根の、左の端の入母屋の妻が、ちやうどまともに、大きくひらけてゐる海である。こゝでは大屋根の棟の線は全く見えず、棟はたゞ一点となつてゐる。さうしてこれを頂点として、入母屋の妻が三角形を形成してゐる。古書院の場合には、この三角形の上の二等辺がいづれも中ふくらみの弯曲線となつてゐて、それが軒の線の左右の端ではねあつた弯曲線と共に、極めて強く弯曲線

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

の支柱を感じさせるのである。松琴亭の入
母屋の場合には、その三角形の二等辺も金も
ふくらみが持たせてないのである。それは一
つには古書院の場合には屋根が柿葺で、三角
形の輪郭となる屋根の端が非常に細いのに對
して、松琴亭の場合には屋根が萱葺で、三角
形の輪郭となる屋根の端が非常に太く、隨つ
て長さの割合(おおらかに)も非常に短く、ふくらみを持
たせる餘裕など全くないことにもよるであら
うが、しかしおもな理由は、古書院の屋根全

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

依かはふくらみであるに對して、松琴亭の大
屋根がふくらみのない平面であることによる
であらう。隨つて古書院の入母屋の輪郭の中
ふくらみは、廣い屋根の平面の中ふくらみを
示してゐるので あつて、それが僅かな弯曲で
あるながら強い印象を受ける所以も、恐らく
そこにあるであらう。松琴亭は屋根の面にふ
くらみはなく、なだ棟の線と軒の線とを以て
弯曲を現はしてゐるのであるから、棟の線が
單にぽつとして現はれてゐる東北面のおいては、

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

上半部には雪曲線を示すのはなくなり、その代りに、大屋根の斜面がふくらみを持っていないことを反映してか、いはゆる精確な三等辺三角形から、いはゆるこの東北面の支配的な形として、上部にかうつてゐることになる。この点は松琴亭の大屋根の入母屋の妻として、当然さうなる筈であつて、あとから変つた形とは思はれない。

ではこの三角形を下で受けてゐる軒の線は、というであらうか。今ではこれは、正面の軒の

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

線とは違って、端の方へ
なってゐる。隨ってこの東北面の全体の形は、
上の二等辺三角形を下方へ押し潰して、軒の
線を底辺とした大きい三角形になってゐる。
上にも下にも曲線はなく、すべての部分が
直線で構成されてゐるのである。これは正面
の大屋根の姿と甚だしく異なった印象を與へ
る。一体これは初めからさうだったのであら
うか。松琴亭の大屋根にあれだけはつきりと
曲線を現はした作者が、その大屋根の横の

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

面でこれほど徹底的に湾曲線を描く行くという
ことは、果してあり得たであろうか。さう
考へること、この東北面の軒の線は、改造の時
に直線化されたのであって、初めは正面と同
じく左右の端において反ってゐたのであらう
と推測したくなる。
この推測に非常に有利な材料を提供してゐ
るのが、松琴亭のこの側に建て増された茶室
なのである。この側の屋根の大きい三角形の、
向って左の端、即ちこの三角形の底辺となつ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

てゐる軒の線がもとはこうで逃かにはね上つてゐたであらうと思はれる部分、その部分の茅葺が無雑作にちょん切つてあつて、そこへ落い柿葺(こけら)の屋根が被せてある。それが茅葺の屋根なのであつて、その軒はいかにも鋭い、はつきりとした直線で、茅葺の軒の線を受けて更に左方へ更に走つて行くことになる。その軒の下には同いく柿葺の落い底がおつと長く突き出てゐて、その輪郭がまた鋭い直線を見せてゐるのである。三角形の左下の陽い

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

このやうに顕著な直線を並べたとなると、四ツ三角形の右下の隅の軒の線のはね上りは、もとのまゝで残しておかけには行くまい。

だから茶室の屋根の軒の線は、この茶室が建てゝ増された時に、直線に直されたのであらう。

さう考へると、桂離宮の東北面で、曲線を取り消し直線の支配が始まつたのは、茶室の普請と同時であつたといふことになる。その茶室の設工について申訳左京が八條宮家の祝辞も讃辞を受けてゐるとすれば、この直線の支

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

写真9 桂離宮 茶室

配の関係といふことも中仮左字と無縁ではないであらう。

この茶室は八ツ窓囲として有名であるか、その八つの窓は、大きさこそ大小さまざまであるか、形は、たゞ一つを除いて、皆矩形である。障子の桟の矩形を縦に積んだり横に積んだりしたたけの形である。たからそれは皆直線の支配してゐる形たといふことも出来る。しかしたゞ一つ、中柱のそばの風呂先窓は、そこにはめてある障子は矩形であるが、窓自

写真 #10
松琴亭次の間より茶室を見る

身は、左右の輪部の弯曲した形になってる。これは中柱の弯曲及び絵仕口の上の丸味と共に、この茶室の中で数少ない曲線の一つである。しかし実は、この窓は、松琴亭二の間の違棚の下に向いてるのである。随ってこの窓の弯曲した輪部をまず〳〵と見るのは、大屋根に弯曲線を持った松琴亭の母屋の方からで、茶室ではむしろそれを矩形の障子で隠してある。それを思うと、茶室の中は大体において直線から成立っていると言える。茶

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

室の外側の、深い庇の下の、にぢり口の周囲の姿などは、特にその感じが深い。にぢり口は右下方に片寄つて居り、その上の竹連子窓は、横に長く開けてはあるが、左端で柱との間に少し壁が残してある。柱の向ふには、連子窓よりも低く、小さい下地窓があけてある。連子窓の上部にも横に長い下地窓があるが、それも柱の間の壁の中央にあるわけではなく、と云つて下の連子窓の中央にあるわけでもない。これらの形がシムメトリーになることは

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

川常には甚深く通じてるやうである。しかしそのためにこゝに使はれてゐる直線は反つて生きた感じを持つやうになつてゐる。

さういふ細工のこまかな茶室の外側に比べると、松琴亭の母屋の東北面は極めて簡素である。そこには二枚の明障子と、それを挟んだ二枚の漆喰が立つて左り、その左手に四角の窓があるだけである。隅つてそこには、最初の松琴亭母屋の田舎家らしい感じと、それに建て増された茶室の凝つた感じとの、著し

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

い對照が見られる。がそれにもかゝはらず、
直線的なものが支配してゐるといふことは、
兩者に異なるところはない。それを上から覆
つてゐる屋根の形にしても、直線的なものの
支配によつて一つの統一を作り出すといふ意
圖は、立派に實現してゐる。屋根の輪郭は隅
々まで直線的であつて、とこれも反りはない。
茅葺の屋根の入母屋の妻は、大い隅の二等邊
三角形である。その下の茅葺の斜面は奥迄く
な平面で、その下の軒の線は直線になつてゐ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

る。それを底辺とする茅葺の屋根の三角形は、左下の陽で柿葺の屋根や底につながってるから、その屋根や底の面積は茅葺の屋根の斜面よりもずっと狭いにかゝはらず、非常に顕著に平面の感じを発揮してゐる。さうしてその軒や底の直線は、その鋭さの故に、直線の支配を強く感じさせる。

かういふ茅室の普請、松琴亭東北面の改造を、中沢左京がうまくやり上げた。それを八條宮妃は、「めづらしく、奇麗に、美しくなった」と

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

ほめると共に、　また八俊宮の思ひ通りの普請
がいよ〳〵着工されることになったと知らせ
てゐる。　その思ひ通りの普請が、　これまでの
、、、、、、、、、、、、
変曲線の支配に對して直線の支配を降立せ
ようとする新しい意匠と結ついてゐることに
は、　そう疑ひのないところであらう。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

改頁

九日 古書院御興宴

前章によってわたくしは、八條宮の思ひ通りの普請なりものかが、実は直線の支配の顕著に認められるもの、随って直線的なるもの平面的なるそのの美しさを生かせようとするものであることを示さうと試みた。茶室を建て增すことによって面目を新たにした松琴亭の

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

東北面の姿は、入母屋の妻の三角形とか、軒端を走ってる一直線とか、茅葺の屋根や柿葺の屋根底などに示されてる真平な平面とか、さういふ小形象の巧みな配置によって、非常に鮮やかな美しさを印象するのである。ちやうどそこの基壇の前へ加藤左馬助作上の朝日名の直線的な橋がかゝってるのを見ると、八條宮が桂琴亭東北面に具現された直線の美を非常に重んじ、それをこの橋によって強調しようとしてゐるやうに思はれる。その然

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

その為われわれは、この白川石の直線的な
橋を、あの新しい様式、即ち直線的なその平
面的なものの美しさを生かせようとする様式
の、指標として取扱い得るとさへ感じたので
ある。

尤もこの白川石の橋は、前に言つたやうに、
寛永四年以前には持つて来られる筈のないも
の、多分五年に持ち込まれたらうと思はれる
ものであるから、桂宮の普請と同じ時にこ
の架けられたのではなく、それよりも二三年

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

の後に、即ち八條宮の思ひの儘の普請が十分に進行した後に、初めて架けられたのであらう。それは多分、中書院の建築や玄書院の改造が終り、ついで松琴亭の建て増しや改造が行はれた時であらうと。もしさうであるとすれば、八條宮の思ひ通りの普請は、松琴亭の茶室建て増しをきつかけとして始まり、中書院建築、玄書院改造、松琴亭改造といふ順序で進んで行つたことになる。白川石の橋はそれらの工事完成を記念するやうな意味をも

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

据つてゐるかと思はれる。

さて以上が八條宮の思ひ通りの普請であつたとして、それ以前の古書院や桂琴亭如屋などが八條宮の意図したところでなかつたかといふと、さうではあるまい。第一次造営当時の庭園が八條宮の意匠に依つたものであつたやうに、屋根に曲線を吹き出してゐる古書院も桂琴亭も、八條宮の指図によつて出来たものであることは、少しも疑ひがないと思ふ。仙洞の茶屋であり系統をひいた田舎風

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

の松琴亭にしても、月見を主眼としつゝ比叡山を見晴らしてゐる丈書院にしても、皆それぞれ八條宮の好みを示してゐるのである。

随つて当時の八條宮は、曲線の支配を好んでゐたのであつて、まだ直線の支配の方に向いてはゐない。当時の普請かゝ修営にとつても思し召す儘」でなかつたとすれば、それは自分の好みに反したことをしたといふ意味ではなく、経済上の制約があつて思ひ通りに行かなかつたといふことであらう。今その点で

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』　請求記号 WB12-71
ガラス使用

思ひ通りにやれるやうになつたためであるが、
ちやうどその時に申込左京が桂琴亭の楽室を
普請し、それが刺激となつたかどうかは断ら
ないが、とにかく曲線の支柱を設けて直線の
支柱の方へ向きなほつてゐたのである。たゞ
らこの時の思ひ通りの普請は、同時に直線の
支柱の顕著な現はれてゐる普請ということに
なるのである。

さてその普請として先づ着手されたのは、
恐らく中書院を大書院に建て増すことであつ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

たゞ思はれる。か秀麿の殿取りからいふと、中書院は古書院や新御殿と聯関してゐるので、あるから、それだけを取り出して眺めるわけに行かない。もつと古書院の御簾等、外立関の姿は、古書院の北側の海をそれだけ独立に見せてゐるのであるから、非常に興味深く感せられる。特に古書院の大屋根の広さとした屋根は恐らく最初の形のまゝであつて、中書院建て増しの時に形を変へたものではなからう

平ら
庵が、こゝでは全面的に見えてゐる。この大屋

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

写真11 御輿寄

と思はれる。池の方に向つて大きく口を開いてゐる入母屋の妻の、輪郭となつてゐる屋根の端、それのふつくらとした弯曲線がくつきりと空を区切つて見える。長い軒の両端における幽かな跳ね上りも、はつきりと眼に入つてくる。これは池の方から眺めた古書院と同じ古書院である。しかしその同じ古書院も、この側には池の側と異なつた条件を見せてゐる。それは、ここに元来存してゐる弯曲線が、その効果を弱めるやうな条件なのである。その第一は池に向いた側には全然見えてゐない棟の直線が、この側には全部見えてゐることである。それは両端に

のふくらみの効果を消すように働いてゐる。といふのは、この寛い屋根は、入母屋のところの湾曲線と同じやうに、ふつく

おいて植めて迫かな跳ね上りを見せないでは ないが、しかしそれが殊んど意識されないほどの長い直線なのである。それにかゝつて、軒の直線もまた池の側に見えてゐるよりはずつと長く、そのせいか両端の跳ね上りの緩かずつと弱い。さうしてこの長い軒の直線と、棟の直線とが、大きく平行して横に走つてゐる。この平行線が大屋根の主な輪郭となつてゐるのであるから、それがこの大屋根全体を

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

らと彎曲した面になってゐるのであるが、その廣されもの彎曲が支配的に働かないで、直線的な要素もそれに釣合って十分効果を持つやうになってゐるのである。だからこゝへ更に直線的な要素が附加されてくれば、おのづから直線的なものの方へ重心が移って行くことになるであらう。これが古書院のこの側面の持ってゐる特異な條件なのである。

中書院建て增しと同時に取りつけられたと思はれる御輿寄の上の庇は、ちやうどさういふ風な、

直線的な要素の附加という意味を持ってゐる。

第一この、底は、大屋根の軒の両端の跳ねより
と関係なく、途中だけを受けてゐるのである
から、直線的に左右にのびてゐて、大屋根の
軒の線との間にはっきりとした平行線を形成
してゐる。このみならずそれは、御殿等の上た
けでなく、左の方へ少し餘分にのばしてあり
ので、大屋根の軒の左右の長さの半分以上も
あるやうに感ぜられ、非常に平行線の感じを
際立たせることになる。またその底の軒端に

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

は、勿論上雨樋がつけてあるか、この樋で十分に雨を避け得るためには、更に大屋根の雨を雨樋で捌かなくてはならない。そこで大屋根の軒と、底の軒とは、二重に雨樋が走ることになる。雨樋の性質上、或程度の勾配を持たなくてはならないのであるから、雨樋の線は軒の線と平行するわけではないから、しかくこゝには平行に近い形で横に四本の直線が相接して並ぶことになる。かうなれば直線なしのの方が優勢にならざるを得な

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

いであらう。

これらは中書院建て増しの際に行はれた御、
、、、、
縁等の改造によつて古書院の上にもたらされ
、、、、
た形の変化を示すものと思はれる。ではそれ
以前の御縁等はどういふ形であつたかといふ
ことになると、われわれには見当がつかない。
第一、御縁等はこの場所ではなかつたかも知
れない。何故なら、現在の御縁等及びその前
の壁龕は、あまりにも強くこの改造時の構想
に支配されてゐて、古書院と同じ構想の片鱗

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

だれも残してゐないからである。

その支敷は、右にあげた底の直ぐ下の濡れ縁や、沓脱石や、そこへのぼつて行く四段の石段などに、実に顕著に現はれてゐる。濡れ縁は御簾等の間の敷居と共に鮮明な横の直線を示してゐるが、その下の沓脱石も、上面はふつくりと弯曲してゐるに拘らず、側面に於て鮮明な、大きい直線を見せてゐる。沓脱石の前の小石敷も、少し弯曲した斜面になつてゐるが、その下の石段は、切り石を使つて、

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

四本の大い違棚を横に並べた按配になってゐる。しかもそれが右の方へ少し餘分にのぼりてあつて、上の庇が左の方へ少し餘分にのぞいてゐるのと呼應してゐるのである。つまりこれは、上から押へてゐる軒や庇の四本の細い違棚に對して、それよりもおっと大い違棚が、六七本も下廣がりに並んで、といつしりと受けてゐるといふ印象を與へる。庇の工作によつて棟や軒の違棚を際立たせようとした構想は、この方強く露骨に現はされてくる。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

かういふ堂々とした御輿寄が、最初の獨立した古書院にとつては大き過ぎる、といはれるのは、いかにもさうであらう。これは古書院にあとから取りつけられたもの、随つて古書院の改造にほかならないのである。

ところで、このやうに、床のところの横の直線群や石段のところの太い直線群が、上と下とに際立つて見えてゐるとすると、その間に狭まつてゐる玄関の戸障子の縦の直線は、いかにも弱過ぎるやうに感じられる。そこでそ

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

写真 12 南陽宮 前後は

れを挿ふかのやうに、この上と下との直線群の間に縦に突立ってるのが、御廟等の左の塀である。これはただ垂直に立ってる平面を簡単に途中で切って高さに段をつけただけのものであるが、しかし平面の美しさをこれほど（感じさせる）徹底的に（強く）出したものは、あまり多くはないであろう。その美しさは、横ん並んだ直線に対抗してる塀の屋根の弧の走り方か、その切れ方にも基くではあらうまいか、しかしその主な要素は、横ん並んだ直線（と縦に立って）

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71　　ガラス使用

さういふ釣合ひとか比例とかが、直線的なものや平面的なものの美しさを作り出してくること

單純な平面との釣合ひにあるのである。床は全く不思議な程である。

この擬の意匠は、多分沓脱石や石段と同じ時のものであらう。何故なら、この擬の裏には便所があつて、そこへの出入りの縁側を上から覆ふために、御輿寄の上の庇が少し餘分にのびて来てゐるのだからである。このことは、庇の形成する横の直線を出来るだけ長くするといふことと、それに直角に交はる擬をこの箇所に立てるといふこととが、用途の上

一行アキ

でも密接に絡み合つて居り、随つて同じ時に同じ人の頭に浮んだ意匠であることを示してゐる。

かこの墻は同時にまた庭との間の仕切りを意味する。それは同時に御輿寄前を一つの世界として囲ふことでもある。さうなると、中門と御輿寄との間に作られてゐる壺庭も、御輿寄と同時のものであらうといふことにならざるを得ない。

この壺庭の中心は、中門から御輿寄前の不

中央公論 五月號

段の中心へ向けて、斜に、真直に走ってゐる直線的な敷石道である。この敷石は、種々の大きさの形に切った石をぴったりと組み合はせて敷いてゐるのであるが、形だけでいふと、矩形が半ば近くあり、梯形も四分の一以上あるのであるから、もっと不規則的な形は二分の一に達しない。しかしそれらが大小さまざまの大きさに配分されてゐるのであるから、案外に不規則的な感じを与へる。さういふ不規則的な直線模様を持った敷石道か、杉苔の一

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用

面に生ひ茂つた中に、一本の太い直線として單純に横たはつてゐるのである。

が、この單純な敷石道の周囲には、いろいろな趣向が凝らされてゐる。まづ中門を入つたところには、方形や矩形の切石が規則的に敷かれてゐるのであるが、その敷石と、直線的な敷石道との間は、四枚の四角な切石をくの字形に並べ、そのくの字の端に一枚の長方形の切石を置いて、つないでゐる。そこから少し進んでくると、右手、控の間の側に、天

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71

ガラス使用

玄石の不規則な形をした大きい飛石が据ゑてあり、その傍に五分の一位の小さい玄石が配してある。さうしてこの小さい飛石の先に、三箇の方形の切石が散らしてある。この切石が杉苔の中に散らばつてゐるところは、四角に切つた金箔を散らした模様の感じに似てゐる。この切石の飛石は、また玄石の飛石を外して控の間の縁先へ續くのである。

更に敷石道をずつと進んで石段の近くまで来ると、左手、庭への出口の方へ、玄石の

写真14

飛石がのぞいてゐる。これは切石は使ってない。むしろ敷石道と石段との間には、二箇の切石の飛石と一箇の大きい天然石の飛石とが散らしてある。さうして更に、石段の方から庭への出口へ導く飛石が、三箇の方形の切石と、細長い直線形の切石とで出来てゐる。わざと天然石の飛石に対照させたもののやうに見える。

敷石道の末端から、もう一つ飛石が手水鉢の方へ延びてゐる。これは天然石の中に少し

切石を据へたものであるか、その行きつく先に立つてゐる手水鉢が、ほかならぬ切石で出来てゐるのである。これは縁側から使ふためらしく、脊の高い、切り立つた長方形の手水鉢なのであるが、御輿寄の方から見える側だけは、自然のまゝの不規則な面が出してある。そは、人工的な切石と天然のまゝの不規則な石とを一身に兼ねてゐるわけである。これはよほど故意の形なのであらう。特にこの手水鉢の、縦に突立つてゐる直線の感じは、御輿

等の彼方にあり、突立ってゐる平面の感
じと呼應して、出入口前の全体の感じを非常
によく引き締めてゐるやうに思はれる。

以上のやうに見てくると、この御庭園等の形
成は、直線的なもの、、、、、、、、
せ、それらの間の微妙な釣合ひによって美し
さを作り出すといふ構想によって導かれたも
のだといへる。これは白川石の直線的な石橋
を指標とする時期の改造や增築の仕事の一つ
に相違ないであらう。

国立国会図書館　タイトル『桂離宮』 請求記号 WB12-71
ガラス使用